2017年　第1回「感性経営10の原則」

レジュメにも書かせていただきましたが、今日はこの5項目でお話をさせていただくことにしたいと思います。年間テーマとしては感性経営10の原則っていうことで感性というものを原理にした経営の教原理というものをお話をさせていただくと。その理性型の経営と感性型の経営がどう違うのかっていうことが一番ポイントになるわけですけど。これまでの資本主義経済下における経営手法っていうのはいわゆる理性的、合理的に作られたそういうこの経営原理で経営は行われておりましたけど、合理性を追求するのではなくて人間性を追求するという、そういう観点から感性というものを原理にした経営にしようというのが、感性経営の10原則といわれるものであります。

今回はこの10原則を4回に分けてお話をさせていただくということになっております。今日は第1回目、

理性型の支配と命令と管理の経営から感性型の愛と対話とパートナーシップの経営っていうのがこの感性経営10原則の第1原則になるわけですね。

de、この5にいたる1234っていうのは、これから経営を進めていく時代背景あるいはこの歴史的現実とはいかなるものかということを把握して、そのことを背景にどういう経営のあり方が望ましいかっていうことをお話しさせていただくっていう。1番から4番までは、本論に入る前のプロローグというか序文というそういう形の導入部にあたるわけで、もっぱら時代認識に関わる、課題が4番目まであるわけであります。

今日はその本論の具体的な内容としては第1原則の理性型の経営から感性型の経営という、ここのところだけお話させていただいて後の9項目は次回からの第2第3第4の中で、残りの9項目をお話しさせていただくということです。

まずは、この我々が今生きているこの時代っていうのは激動の時代、激変の時代、動乱の時代、この激しい変革、変化が求められているんだっていうことをまずしっかりと頭に入れなければ、これからの経営ってものを考えていることができません。とにかくこの去年11月に、アメリカでトランプさんが大統領選挙に当選されて、正式に大統領として活動を始められました。

毎日ブログっていうかtwitterとか何かそういうことでつぶやきを世界に発信されているという状況で、一言一言にマーク株価も反映してですね、上がったり下がったりというそういうこの変化って言うか、激動の動きを作っているのがまあ現実であります。

アメリカの大統領選挙というものは、あまりの激しい互いの非難の応酬のし合いという、そういう醜い選挙戦を展開しましたので、アメリカ国民すら本当はどちらに入れたくないんだけど…っていうそういう選挙が本当に流れていったっていうのはまあ実情でしたよね。だけでもこの保守的な変わらない、政治をやっていこうとするヒラリー・クリントンさんに対して、トランプさんは変革変化というものを中心に選挙戦を展開された。どちらかといえば現実のアメリカの大半の人々からするならばやはり、変わらないアメリカよりも変えてほしいと。そういうことのほうが希望として多くって結果としてトランプさんが選出されたという結果に至った。選挙の結果はトランプさんが当選されましたけれども、この選挙人の獲得ということの背景には、各国民一人一人が誰に投票してしたのかということからすると、数としてはヒラリー・クリントンさんの方がトランプさんよりも勝っていたというこの選挙の状況でした。

トランプ大統領が誕生しても現実現在でもまだまだ大統領として認めがたいというそういう運動というか、集会があちこちで開かれているという現実であります。

中東7カ国の人たちの入国を制限するという…アメリカのみならず世界全体がそれはおかしいじゃないかと問題だということで差別だということでいろんな国から反対の声が上がっています。だけどもこの歴史というものは、人知を超えた天の計らいによって進んでいくものであって、人間の作る歴史の背景には格別に宇宙の摂理というものですね働きがあるということを我々は忘れてはなりません。その意味ではですね、今回アメリカの大統領は誰になろうとも、もはやアメリカの国家的衰退っていうものは何人誰とも阻止できない天そういうこの大きな歴史の動き流れの中で今いろんなことが起こっておるという風にとらえておかなければならないと思います。時代の大きな流れから言うならば確実に欧米の時代は去ってこれからがこれからはアジアが燃える…アジアによって世界の歴史は作られていくというのがこれからの流れだっていう事ですよね。欧米人が作ってきた近代と言われる理性を原理にした時代っていうものが明らかに退いていって、これからの世界文明の中心がアジアへと移行していく。そしてアジアの発展とともに世界史は近代から脱却して近代ではない全く新しい原理と価値観を持ったアジアの時代っていうものがこれから形成されていって、その流れで歴史は展開していくということを我々は掴んでおかなければならないと思います。トランプさんがどういうこの政治をしようともアメリカの衰退は避けがたい…そういう認識を基本的に持っていなければ時代を読むことができません。大統領選挙においての国民の反応は、お金に支配され、お金を原理にした政治が展開されていくという金権政治というものに対するまあ嫌悪感、批判っていうものが非常にとの強く出てきました。

選挙を通してアメリカ人が求めたものは、これから求められる指導者っていうのは、お金のある人を中心にした政治を行う金権政治ではなく、金に支配されない、人格の優れた指導者を本当は求めているってことがはっきりしました。これから社会が求める指導者がいかなる人物であるかということがはっきりしました。時代は能力に基づいて金や物質を手に入れていくという西洋の歴史を原理にした近代からアジアに移ってくるという必然性が出てきたのか？それはこのアジアが基本的にお金を持っている人よりも能力に優れた人よりも地位のある人よりも、人間性において優れた人物を作るというものは、アジア全体が持っている基本的な精神性であります。これは仏教にしても、宗教というよりは一、種の人間学的で内容を持ったそういう考え方をしているのであって、人間性の進化、人間性を成長させる、そういう課題が仏教の究極のテーマとして存在しました。お金に支配されない、清廉潔白なことを求める。そういう思想が儒教であり、老荘思想でありました。また日本の神道においても、宗教にしても、神道には教典がありませんので確たる内容が

いかだのものかってことを知ることはできませんが、だけども神道の祭祀、活動を見れば、古事記に書かれて居る様に木桶赤き心って言われるように神道が究極に目指すものは、汚れなき心をもったいさぎよい生き方をする…これが神道の精神の根本にあるものではないかという風に思われます。それがみそぎと払いという行為をいろんな行事においてするわけで、自らの身についたけがれを清めて、そして汚れを払う、自分の身を清めて、清らかで汚れないしかも潔いという生き方が日本の精神として武士道にも反映されて、世界からも尊敬される人間性という評価を得ているわけであります。

5年前のあの大震災においても、日本人の人としての行うべき道というか、身勝手な他人のことを考えないそういう自分本位な行動する人間が非常に少なくって多くの人間が互いに相手のことを考えながら少ないものを分け合って、苦境をしのぐ…日本人の人間性、民族性が評価されたということがあったことは記憶に新しいところであります。

そういう意味においてもインドにおいても中国においても、またこの日本においてもその主たる文明の目標っていうものが人間性の成長、人格を磨くっていうところにあったってことを考えるならば、これからの人類が求める指導者というものが、金で動き、金でものをことをなす人ではなくて人間性に優れたそれ人物を求め始めたということですね。今、宇宙はあるいは天はこの人智を超えたか計らいによって、西洋の時代を終わらせて、アジアの時代を開こうとするという流れになっているのです。

アメリカ、トランプ大統領の行いを見ていくと、残念ながら、ことをなぜも成すほど、ますますアメリカ社会の混乱は増幅されていって、そういうふうに大国も衰退していくんだなぁということですねこれから我々は目の前にすることになると思います。これからの人類が求める指導者、上に立つ人間っていうのには人間性の素晴らしさ、尊敬される人格っていうものが期待されるっていうことを我々は忘れてはなりません。

これは単に政治の世界だけではなくて、経済の世界においても、人の上に立つ人間、経営者・社長、各部署もリーダーとなる人間に求められる、最も重要な力はあの人格の力である。人間性において優れた人が上に立たなければ、人はついてこないということになります。いかに人格人間性といっても、いわゆるこの金のないお人好しでは経済社会はやっていけません。結果として金が儲かる金が入ってくる、そして必要な人がついてくるってそういうまあリーダー像っていうものをこれから考えていかなければならない目標であります。札束でほっぺたをはたいて言うことを聞かす…そういう時代ではないと人間性や人格というものを心服して、そういうものに尊敬の念を持って人がついてくる…そうすることによって企業が発展し、またそのことによって仕事にも熱が入り、指導者とともに仕事をしていこうという気持ちになっていく。経済社会における目標としてもこの人間性、人格の重視っていうことは非常に大きなこれから目的になり目標になってくると。

欧米社会というのは、自由と平等を理念にして発展してきた社会でありましたが、限りなく自由を追求することをしていけば、社会は世界はどうなるのかっていうことをアメリカの大統領選挙は象徴的に物語ったというふうにいう事が出来るわけであります。自由競争が果てしなく続いていくのであれば確実に貧富の差の拡大というものが増幅され、格差社会が作られていくんだということがはっきりとしました。

これが自由っていうものを理念にし、自由っていうものを目的にしたなれの果てだっていうことを我々

はよく考えてみなければなりません。自由っていうものを理念にして社会が発展する時代は終わったんだということ。確かに自由っていうものは人間とって大事なものです。誰しも自由でありたい誰しも縛られたくはない、そういう思いは非常に強く命にはあるんですけども、だけども無際限な無軌道な自由っていうものが行き着く先は、勝つ者は一人であって負けるものが多い…。最後の勝ち残るものは一人しかいない。3%の大金持ちが97%の貧困を支配するという、そういう社会を作ってしまった背景にある原理であります。この自由というものを究極の原理として生きる、そういう時代は終わったという風に言わなければなりません。だけどもでは、自由はなくてもいいのかって言ったらそういうわけじゃないんだけど、自由というものを原理にして人間が成長し自由っていうものを原理にして社会が発展するって時代終わったということですね。

もう一つ近在社会には平等って理念がありました。平等にはこれは資本主義国家じゃなくて社会主義国家・共産主義社会において追求された原理であります。実際に欧米の社会主義国家や共産主義社会というものにおいて象徴的に示されたわけであります。現実に社会主義国家においてはどうなっているか、社会主義・共産主義社会においてはどうどうなってるかっていうと、平等が限りなく追及されていったがために多くの人々が働いても働かなくても同じ給料をもらえる…これは今の日本の国会で審議されておる同一労働同一賃金という問題と絡んでくるわけですけども。同じ仕事をしておったら同じ給料をもらえるという、そういうことだったら働かなくて働いてなくても同じならば、労働意欲が減退する。怠け者をつくってしまったっていうことですね。労働力の減退っていうのを作ってしまい、生産性がものすごく落ちました。ご承知のように社会主義国家・共産主義は非常に貧乏な国家になってしまったんですね。そして最終的に社会主義国家は崩壊し、自由主義国家が生き残る、勝利するという結果が近代において作られてきたわけであります。

思想的には社会主義は自由主義によってこの殲滅されたということが言えます。だけども自由主義国家の経済体制である資本主義経済っていうもの。資本主義経済だけでは、自由というもの原理した経済だけでは、貧富の差が拡大するということもあって、結果として資本主義社会はやがて社会主義的な制度を取り入れた修正資本主義という形にどんどんどんどん変わっていきました。修正資本主義っていうのは資本主義経済のあり方の中にこの社会主義的な考え方を取り入れるって事。実際には資本主義だけでは貧富の差が拡大しているっていうことで、貧しくなっていってしまった人をも救わなければならない。なぜ吸わなきゃならないからと言ったら、消費者が貧しくなったら購買力が落ちる→購買力を維持して金持ちがさらに金持ちになっていくためには消費者に物を買わせなきゃならない→ものを買わさなきゃ儲からないということ。

成長の限界っていうか、もうこれ以上金持ってなれないって限界が当然やっていきますので、そういうところから自分たちだけが金持ちになるだけじゃなくて、消費者もある程度金持ちにしてやらないとものを買ってくれないから消費活動が減退するじゃないかということで、修正資本主義と考え方が出てきました。資本主義のなかに社会主義的な福祉政策ってものを取り入れるって事になってきました。

現実に金持ちは少ない、貧しい人が多いという社会構造を背景にして、福祉政策がどんどん進んでいったわけですね。これには消費力・購買力を回復させなきゃならないということだけじゃなくて、民主主義社会っていうのは選挙によって議員が選ばれてくるわけで、その選挙民のほとんどが貧しい人々だということになれば、貧しい人々が喜ぶような政策をしないと次に自分が当選できないということです。政治的な背景からも見てもどうしても政治家は行政ということに重点を置かざるを得なくなってきました。

どんどんどんの税金も福祉に回すという、そういう政治が行われるになってきまして、さらに国民を喜ばせるために福祉を充実させるようになりました。福祉を充実させるために国債を発行すると…。結果として国の借金をどんどんどんどん増やし、ギリシャの国家財政破綻という状況が出てきたわけであります。イタリア、スペインもそういう状況になっています。ヨーロッパ各国がそういう福祉政策を充実させるがために財政破綻というを危機を抱えておると、これがいわゆる平等という理念を追求していった結果生じる現象であります。自由を追求しても社会は崩壊していく、また平等を追求していっても国家経営は成り立たなくなっている。近代社会の終わりというのは、自由と平等を理念とする社会の終わりというものをはっきりと示したっていう結果になっていますい。自由と平等をメインとして追求してきた社会が民主主義社会であります。貧富の差の拡大とそれから福祉政策を用いるがゆえに国が破綻していく…このことをもって我々は民主社会を終わったと、宣言しなければならないと、そういう時代を今迎えて居るんだということですね。残念ながらまだまだ世界は民主主義の崩壊という事実を認めておりません。まだまだ民主主義を目的として政治が行われているのが現実であります。今回のアメリカ大統領選挙見ても、民主主義社会において行われるこの選挙がいかに社会を混乱させ社会に対立を作り出して民主社会を破壊するかっていうことをまのあたりに見せました。民主主義社会の内部崩壊であります。

まあ民主主義の政治は政党政治と言われるわけですけど、政党政治っていうものが実は党派を支持する人々の対立というものを社会構造として作り出してしまいます。社会っていうのは一定の秩序によってはじめて社会と言われるものであって、社会に秩序がなくなってしまったら社会の崩壊というふうに言われるわけであります。明らかに民主主義社会の終末を迎えており、もう民主主義社会が終わった…だからこれから我々は民主社会よりもっと素晴らしい社会を考えだしていかなければならない。時代が始まったんだっていうことを認識しなければなりません。

そしてこの民主主義社会に代わる新しい社会のあり方を求めていこうとするならば、当然民社会の理念である自由平等という近代的な理念は破棄しなければならない。ではその自由と平等を理念にしない社会とは何なのか？それが先ほどから申し上げておるこれから人類が目指さなければならない理念の1つが人間性の成長であると。自由と平等を目標にするんじゃなくて人間性の成長、人間性が進化するってことを理念にし、目標にして我々は政治をし、経済活動をし、生活をしなければならない。自由に代わって我々がこれから理念にするべきは人間性の進化、という理念である。人間性を成長させることが自由に代わる新しい次の時代の人間の究極的な目標だというふうに言わなきゃならない。もう一つ平等に代わって何を我々はこれから

理念にしていかなきゃならないのかといったらこれは明らかに平和だ。近代社会は対立を原理にして形成されていった社会である…だけども、もうこれ以上人類は戦って殺し合ってはならない。戦争の時代から平和の時代へと社会、地球のあり方を変えていく、いかなければならない。20世紀の中頃まではまだ戦争は正義であった。戦争は正義なんだ、国家を発展させるためには戦争して新しい領土を獲得することが正義の大きなテーマでした。だから欧米社会は全アジアを植民地化したわけですよ。だけどこういうこの対立構造でこの 世の中が発展していくって原理はもう終わった、競争して勝つというものは終わった…これからはいかにして平和な世界をつくっていくかということが人類の大きな目標になってくると。

これからの時代、新しい時代の理念となるべきは自由に変わる、人間性の進化。平等に変わる平和。この2つが、作っていく新しい社会の理念になるべきものだ、と考えなければいけない。

金を増やしていくっていうことを目的にして経済は営まれてきましたが、金を目的とする経済のなかで人間が働けば、確実に人間性が破壊される…金を目的とする経済のなかでは人間はすべて手段ということになってしまい、材料として人材というふうに言われて働かされる。金のための材料が人間として扱われてしまう…資本主義経済におけるですね実体であります。金を増やしていく活動の中で人間はストレスを感じて、

病になり、または自ら命を絶って、不幸になっていってしまう…これが経済下における人間の実態でありました。キラーストレスというドキュメンタリーの番組を組んで2週間にわたって理性によって作られるストレスというものがいかに命を犯す恐ろしいものであるかということを紹介していました。人間性を破壊され心を見失って、そして自らの心も病んでしまう。資本主義経済の歪んだ構造が医学的に解明したわけですね。金を儲けている人ですら、金を儲ける過程において苦しむ…金を最優先の価値と考えて、そのためにすべてを捨てる、賭けるという生き方をしてしまうのが、資本主義社会の実情である。「俺は金のどれにならない」と言っても、必然的に金を稼ぐために働かされてるって構造に引きずり込まれてしまうんですよ。これは誰もそれを拒否することはできない。それがなんとかしなきゃならないっていう問題として浮かび上がってきておるわけであります。民主主義社会に加えて資本主義経済も同時にその終末を迎えておるという風に言わなければなりません。

このことを100年以上前に予言した哲学者がカール・マルクスであります。マルクス主義っていうのは資本主義経済というものは結果として、労働者を不幸にする…そして、貧富の差の拡大を作り出ししまうことによって労働者による革命が生じる…そして資本家はその地位を追われやがて労働者が主体性をもった社会が作られる…それが共産主義社会といわれるユートピア思想につながっていく。一時、社会主義国家の崩壊とともにマルクス死んだと言われたんですよね。今こそマルクスは息を吹き返す。

まさにマルクスの予言通りに世界はなってしまってるんだって言う、この現実があるってこと我々は

忘れてはなりません。だからと言ってこれから世界が共産主義社会・社会主義社会になっていくのかと言ったら、そういうことではない。共産主義社会・社会主義も自由主義も資本主義もこれは近代のイデオロギーにも基づいた政治経済のありかたです。これから我々が作っていく新しい時代の政治も経済もイデオロギーに基づかないものを作って行かなければならないわけであります。それがこれから我々をつくっていくアジアの時代、東洋文明の目標だという風に言うことができます。

感性の哲学においては、経済社会は脱資本主義に動いているんだ、そして資本主義という金を目的とする経済のあり方から人格・人間性を目的とする経済のあり方に変えていかなければならない。

だからこれから我々は目指すべき経済社会経済システムは人格主義経済と呼ばれなければならないということを申し上げておるわけであります。何のために働くんですかって言ったら自分自身の人格を磨きたいから働くんです。経済活動をすることなしには人格は鍛えられない、磨けないんですという風に言って働くって時代を作っていくって言うんですね。労働が金のためではない、労働が自分自身の人間性や人格を磨き鍛えていくためにこれから作って行かなければないということを申し上げております。この目標がいかに正しいかということを今回のアメリカの大統領選挙は象徴的に表現したわけであります。

政治っていうものも政党っていうものをもとに政治は行われてきました。その政党を原理にして政治が行われることによって明らかに社会は分断されていく…いわゆる政党政治はこの社会の内部崩壊っていうものをつくりだしてしまうことになるんだ。このことも全世界の民主主義社会がはっきりと物語っております。今民主主義と言われる国々は政党の対立で苦しんでるんだ、政治が社会を破壊する。政党が政治を混乱させ、政党が社会を破壊するっていう現実が今の世界だ。であるがゆえに我々は、明らかに政党を原理にした政治をなくしていかなければならない。であるが故に政治というものは政党政治から脱政党へと動いて居るんだっていうことを我々は意識しなければなりません。民主主義が終わったということを言ってる人も誰もいませんけど、政党政治が終わったっていうことを言ってる人も誰もいないんですよね。だけど明らかに時代の本音というか、時代が本当に求めているものはなんなのかっていうことを考えれば、政党が存在することによって政治が混乱し、政党が存在することによって国民が分断されていくという民主主義の内部崩壊を何とか乗り越えていく道をこれから探していかなければならない。

政党というのは基本的に多数決原理というものを基本にして成り立っている政治の形態。数さえ集めたら勝てるっていうのは民主主義社会の基本的な精神です。だからなにがなんでも数を集めようとする、量の正義なんですね。しかし、これからは量から質へ展開していく、量的に満たされたならばその次に出てくるも質の向上。量から質へと経済社会も変わっていくし、色んなものがそういう気質で変化していくのが現実であります。

現在は政党政治の末期的状態を迎えておるという風に考えなければならない。明らかに原理的な政治革命が今求められているという風に言うことができるわけですね。そのことも今回のトランプさんの政治というものが明らかに表現しております。政党に基づく、政党を原理にした政治じゃない。トランプさんの出身母体である共和党においても分裂していて、反トランプの人たちもいるんですよね。トランプさんはまったく気にしていない。彼の政治は明らかに政党を基礎とした政党政治というものから脱却している。ではトランプさんの政治は一体どういう政治なのか？国民の生活感情を原理にした本音の政治であり実感の政治。

イデオロギー、理性の政治ではない。感性の政治へと転換しているわけです。

国民の本音を代弁しているから、国民の実感を形にしようとするから国民は賛成するんだ。アメリカ社会にはテロに対する恐怖がある。あの9.11というものを意識して、イスラムの報復を恐れている社会。イスラム教徒の国内への入国を拒否するという暴挙とも言える大統領令が国民の過半数から支持されると言うすごい状況になっているわけですね。これは明らかに理屈よりは感情を原理にした、感情というよりは実感と本音を原理にした政治の転換だという風に言わなければなりません。そして今トランプさんはアメリカ第一主義という考え方で政治をするということを宣言されております。もうアメリカの現在の経済力と軍事力と政治力を持ってしては、いつまでもお人よしになって外国のことを海外のことに金を使ってはおれないという状況がアメリカにはあります。どうしてもアメリカは政治的にも経済的にも軍事的にも社会から手を引いていかなければならない。まあそういうこの状況に立ち至ってる。大きな歴史の流れからしてアメリカの衰退は避けがたい。アメリカが内向きの国益優先の政治を行おうということになれば、必然的に全世界の国がそれに右にならえをして国益優先の政治姿勢というものに転換していくということは避けがたい。

グローバル的なTPPのような経済システムではなく、2国間交渉で一対一の交渉で、これから物事を決めていくっていうことを言っています。これは大きな政治の流れからすれば明らかにこれまでの社会秩序を崩壊させる、これまでの社会秩序を破壊する、そういうこの意味を持った政治宣言であります。大転換期故にいつまでも古い秩序を守っているようでは時代は前に進みません。天は宇宙は摂理の力を持ってアメリカにトランプさんという常識はずれの活動をする政治家を必要があって作り出したわけであります。時代を本当に動かそうと思ったら、トランプさんぐらいの激しい、非常識的なことをする人間が出なかったら、時代は変わらないし、時代は動きません。その社会においては悪人と呼ばれる、いつの時代もそうですが、その時代の常識に反することをしなければ新しいものは生まれてきません。

他の人がやらないことをやる人間がいて、新しい時代へと、人知を超えた天の計らいとして出てきた人物という評価もできるわけであります。そういう大きな歴史の流れからすると、国益優先のアメリカ第一主義という政治をするということになったのか、第一の理由はこれまでの社会秩序を破壊するためであります。破壊することが出来なければ新しいものを作り出すようことができません。だからトランプさんはの仕事の第一は過去との因縁を断ち切って、過去を破壊するという仕事がしなきゃならない歴史的大業である。この破壊は常識的な人間にはできない。歴史を動かす破壊的な勇気を持った人間しかできない仕事。

これに基づいてこれまでの世界秩序は崩壊していく…アメリカも「世界をアメリカ化する」というかつての考え方が破壊されていく。新しい世界市場を作っていこうと思ったのなら、グローバル化っていうことはこの止めなければならない。そしてこの全世界の各国が、自国優先の原点に戻った政治をするってことから

次の新しい市場を作る活動始まるわけであります。

まずはアメリカの政治を原点に戻し、原点は自国中心主義だ、と。自分の国の事しか考えない。その政治の原点に立ち返ることによってそこから新しい事情をどうすればいいかを考えていこう。そういう形です。

全世界がお互いに対等の関係で2国間交渉をやりながら、新しい世界秩序を模索していく。

だからといって国益優先という政治は、これからも続いていくかって言うとそういうわけではない。明らかに社会は基本的にグローバル化している、世界はインターネットでつながる、すでに国境を越えて情報は世界を駆け巡る…そういう状況が具体的に作られている。後戻りできない流れができている。だからやがてこの国益優先の政治は、必ずまた全世界のことを考えながら、各国は自らの国の在り方を考えていくグローバル的な視点で政治を考えるって言う状況に立ち戻っていくことになるわけであります。

常任理事国で形成されておった国連の体制もはっきりと変わるであろうと、第二次大戦で勝った国が世界を支配するのであっては、戦後は永久に終わらないですよね。全世界の国が大小問わず独立した国家というそういう地位をまず確立して、お互いに大も小も対等の関係で意見をたたかわしてこれからの国の社会のあり方を模索していく場を土壌を作らないと新しい時代を変えることはできません。この国益優先というこの国家のあり方を全世界は受け入れなければならない。しかし、自分本位な政治がいつまでも続くわけじゃない。やがて必ず世界は東西文明の融合として地球文明をつくっていくというその流れに入っていかざるを得ませんからね。現実を生きる人間の歴史的な視座、視点が必要となります。

激動、動乱の時代っていうものがどういう意味、方向性を持っているものかっていうことをまずはお話をさせていただきました。いかなる立場にあろうともまずはそういう歴史認識、時代認識というものを見識として、ご自身の中に構築していただくっていうことがこの時代を自信を持って生き、またこの時代を自信を持ってリードしているそういうこの指導的立場に立つ人間の教養ではなかろうかというふうに思うわけです。

必ずしもこの考え方が優れているわけではありませんが、私が申し上げたような視点、物事を見るって事も

できるってことを理解していただければ幸いです。

時代がこういうに激しく動く中で、まずこの人間観の激変というものが、はっきりと見えてくる。「理屈ではない、心がほしい」という声が増えています。「人間の本質は理性だ」という時代ではなく、「人間の本質は感性だ」というふうに変わってきていると思っています。それから近代は、理性しか信頼できるものはないんだという考えで、だからこの人間が信頼できる理性っていうものを原理にして新しい時代をつくっていこうということでこの近代が始まったわけですよね。

この理性というのは、近代当初の考え方からすれば、「理性っていうのは神から人間に与えられた能力で

あって、完璧完全な能力だ」だから不完全な人間はこの完全な神から与えられた理性に従って生きるってことが、正しい生き方と言えるとされています。

宗教的にも認められ、宗教的な意識からも矛盾することなく、神から与えられた理性によって、

人間は合わせて理性を原理にして、生きていくことが人間として最も正しい…それが近代の考え方です。

エデンの園に住んでいた頃、知恵の実と言われるリンゴを食べて理性を獲得したんだ。神の命に反して人間が理性っていうのを獲得したという。そういう聖書の逸話からも認められ許される、そういう話だって言うようにされています。結果としてあらゆるものを合理化していくってことが常識になってきましたし、理性を原理にすることによってやる科学という学問が急速に発達して今日に至っておるわけであります。

人間が理性を原理にして生きることをするならば、必ずや作為に陥って神が意図するような結果ではなくって人類は不幸になってしまうだろうと考えられておるわけであります。終末感っていうようなそういうものとが、一体になって人類の未来っていうものは考えられているわけですね。

具体的にどういうことなのかというと人類は理性を原理として科学技術文明をつくってしまった、

理性そのものが原罪…理性を使えば使うほど神の意に反して罪を犯してしまう、自ら不幸になっていくということが予言されているわけですけれども。それによって、自然破壊が起こった環境破壊が起こった…神の意志に反して獲得した理性に基づいて人間が作為的な活動をすることによって、人間は不幸な現実を作り出してしまったという結果が出てきている。聖書からいうならば、当然の報いというふうにこういうことができるような結果なんですよね。

理性は神から人間に与えられた能力と考えて、そして人類は理性しか信頼できるものはない…だから理性をもとにして時代をつくっていこうということで、近代のさまざまな活動が始まって合理化というあらゆるものを便利にしていくそういう便利主義的な技術というものがどんどん進んでいくことになっていったわけであります。だけどもその結果、環境破壊などの不幸を招いてしまった。「本当に我々はこれからもこの理性に従って良いのか？」という反省が出てきたわけですね。

理性というのはそんなに信じられるもの、盲目的に理性を原理して生きていってもいいのかというようやくそういうこの理性に対する盲信から目覚め始めた、理性に対する絶対的信頼は揺らぎ始めたという状況に今なってきているわけですね。だけどもそういう状況にありながらもなおかつ人類はまだ理性しか信じることができるものはないのでまだまだ合理化を進めておりますし、理性に基づいた学問っていうものをやっております。

理性に変わる新しい原理をまだ人類ははっきりとは見出していない、今の偽らざる精神的状況。だけども明らかにすでにもう人類は理性に対する盲信から目覚め始め、また理性に対する絶対的な信頼というものが

揺らぎ始めている…理性への不安、理性的であることに不安を感じる…それもまた事実であります。

こういう状況の中で一体我々は理性に変わりうる、信じることができる原理っていうものをどういうふうに見出していったら良いのか、この課題に直面しています。理性的であることへの不安、理性への不信、理性批判というものは、すでに19世紀の中ごろから出てきておりまして、哲学的にはいわゆる実存哲学っていうものが反理性のものとしてでてきました。フロイトの深層心理学、理性による命の抑圧というものが、人間にストレスを作り出し、そのストレスがノイローゼになり、そして精神病が誘発される…理性による命の抑圧、本能への抑圧っていうものが存在すると発見したのがフロイトの業績だったんですね。

なぜそれが精神病の原因ということになるのか、動きの中で理性と本能を対流させるというそういう構造ができてくるということは、避けがたい必然的な状況なんですけど、自分の中には理性としての私と本能としての私があるというふうに考えるという、そういう意識が形成されていきまして、つまり、自分が2人いるという構造なんです。この自己分裂という、意識が固定化されることによってそれが自分の中で混乱を、矛盾混乱を作り出すことになって、それがさらに深刻化していくと精神分裂病ということになっていきます。つまり二重人格っていうのはそういうものがこう出てくることになるわけですね。精神病ってものが発生する根底にはそういう自己分裂の意識ってものが作られてきたというところに精神病の多発ということになります。理性というのは近代になって急速に発達した能力ですので、近代に急激に精神病が増えてしまったのです。我々は自分の生き方としてはっきりと認識して居る必要がある課題であります。

理性によって欲求を抑えて、理性によって感情をコントロールしていけることが人間として正しい形であって、仕事をしていく上でもそういう作業が必然的に求められる…ストレスっていうものを自分の中で作っていくことになって、やがてそれがキラーストレスとなって自分の命さえも危うくするということになってしまう原因なんだ。だけど現実にどんな人間の中にも分裂した自己は人間の中にあり、ほとんどの人間はそれを処理する力を持っている。それをなくしてしまうといけない。

自己分裂の意識を「俺はひとりだ」という意識に転換するかというと、まだ人類は答えを出していない。

では、感性の哲学はどういうふうに言ってるかって言ったら、理性と本能を滞留させるんじゃなくって

理性と本能を協力させれば、ひとりの私が現れる。いわゆる理性と本能の統合、理性と要求の統合、理性と感性の統合って言うんですよね。統合することによって俺は一人だという、実感に我々は辿り着くことができる。

では、どういう風にすればこの理性と欲求、理性と本能を統合して俺は一人という生き方で矛盾なく自分の人生を生きることができることになるのか。感性の哲学では、我々が俺・私・自分って言ってるものは、実は理性ではない。あれは理性的になればなるほど個性がなくなってしまう、理性的になればなるほど自分から遠ざかる…だから理性は本当の自分ではない。我々が本当の自分と言っておる自分っていうのは

いったい何なのか？それは実は欲求だ、本音だ、実感だ。感性を大事にし、感性を中心に据えなきゃならない。

だからといってこの感性を重視して、理性を敵に回してはまた分裂になってしまう…。分裂させないためにはどうするか？本当の自分である本音と実感を肯定し、それに沿った生き方ができ、他の人と対立しない、喧嘩しない、それをどうしたらできるのかを考えるための手段能力として理性を使う。

そういう形で理性と本音を統合する…。

自分のしたいことをしてお金を儲けるためにはどうしたらいいのかっていうと考える手段能力と理性を使う、理性と本能や理性と欲求を協力させるならば、自己矛盾のない自分の中に対立がない、自分で納得できる生き方ができるんだ。だから会社において命令されて与えられた仕事も命令されて与えられてやらされてるっていう風に考えてはならない。命令されて与えられた仕事も「なぜそれをする必要があるのか？」っていうことを自分自身で考えて、そして仕事の重要性や仕事の意味や価値を考えていくことによって、納得うして、実感することによって、ストレスや矛盾を感じることなく自分がやらなきゃな、と思うからやるんだという、統一された自分の行動としてその与えられた業務を行う…それによってどんな仕事も「俺がやらないかんと思うからやってるんだ」「命令されたからやってるんじゃない」と。それによって、本当に与えられた仕事に命を燃やせる人間になれるかどうかが決まるわけですね。どうしてもそれが自分の中でやる必要がある、やる意味があるということが納得できなければ、ある意味でその仕事を拒否しなければならない。

また会社を辞なければならない、そういうことも選択肢の中に入ってくる。だけどもこの会社に入ったこと自体が人知を超えた天の計らいとして縁を持った会社なのだ。だからこの会社の中で自分が生きていくっていうことは、自分の意思を超えた天の導きによって与えられたもの。できるだけその会社において自分に要求される仕事っていうものを納得して自分の中でやっていかないと、ストレスのない仕事っていうのはできません。人間意味を感じたらやる気になるんですよ。やる気って事は自分でもしたいというそういう気持ちがわいてくるわけです。やる必要があると自分で思えるって事ですね。その意味を感じるってこと、バランスを感じたら命に火が付く。そういう自分をつくっていくために理性を使ったら、自己分裂から脱却できる。その仕事を自分の命が欲求するものにしていく、自分の本音で納得できるものにしていく、あるいは本能的にしたいと思える仕事にしていく。その力を理性にもたせなければならない。だから感性の哲学では理性を磨くとこともものすごく大事な課題である。

だけども、人生において求められる理性能力っていうのは学校で習った知識や技術ではない。人生において求められる本当の理性能力っていうのは、まあいわゆる知恵ですね。本当の思考能力。これを違った言葉で表現するならば、学校で習うものは数学的合理性、科学的理性。

人生を生きるために必要な理性というのは、生命合理性を原理とした理性の働きである。生命合理性とはいったい何なのか？合目的的理性。目的に合った理性の使い方。この目的を実現するためにはどういう方法が最適、最上だろうかを考える理性、知恵と呼ばれる理性なんです。目的に合った方法論を考える理性、これが合目的的理性。仕事をしながら自分自身で考えて出さなければならない答え、これは生命合理性に基づく合目的的理性の働きなんですね。知恵という理性を我々は磨いていかなければならない。

これが最適だと思ったら、それを決断し、自らの意志として実践にうつす。本当の生きるために必要な理性なんですね。

だけど、仕事をしておる実践的な人間であるならば誰しも無意識的にしておるもんなんですよね。だけどそれが単に与えられた仕事の結果を出すために最上最適最短でできる、探し求めるというこのやり方に終わってしまっておって、与えられた仕事を自分の欲求と結びつけて、そしてしたいから、そこで自分を結果を出したいから、だからもっとも有効な方法を深められていないから、ストレスが生じてしまう。欲求や本能や感情と結びつけなければ、すべてのものはストレスになる。納得の状態でことを起こして、模索していく…自分の中で自分は統合されていて矛盾がないからストレスは感じない。苦しむのではなく、楽しみながら、欲求に基づいて答えを出す。

そういう理性の使い方っていうものを我々は磨いていかなければなりません。生命合理性、人間的理性というふうに言ってもいいですね。知恵というのは湧いてくるものです。命から理屈抜きに湧いてくるのであれば、実感・欲求・感情・本能などと結びつかないと本当に湧いてくる知恵は作れません。そのために我々は意味を感じ価値を感じ値打ちや素晴らしさを感じて、やる気になる、命が燃えるという状態を作り出すという作業を日常にしなければならないですね。原点は、欲求や感情や本能や骨や実感なんですよ。

それと結びつく口づけることによって理性的な結論も湧いてくるんですよ。それが知恵。感性と結びつかないで、理性だけで考えて作り出す結論というのは、知恵ではなく知識や技術を基礎にした結論になるわけですね。それでは、ある意味、できることしかできない理性的な限界のある力・結論です。

勉強して学んで学習して獲得した知識や技術を超える知恵というものを自分の命から湧き出させる人間になれるようになります。この力により、不可能を可能にする、そういう力が生まれてきます。これが本当の仕事ができる人間の実力ですね。いわゆる普通の人間の数字を超えるんですよね。

知識と技術、学習して学んだものを超える。ある意味で官僚的、保守的な仕事の仕方っていうのを超えてどんどんあっと言わせるような結論を出して、新しい道を拓いていく。数学的合理性と生命合理性の違いを考えて、理性と本能を統合して、協力をさせて有機的に働かせるって力を作っていかないとこれからの新しい時代をつくっていく人間にはなりません。道なき道を切り開く、そういう力っていうのはまさに生命合理性の力。模索的に結論を出すことが大事になります。

だから本当の自分である本音・実感・欲求というものを実現していかなければ、本当の自分が納得できる人生は歩めない。正しい人間観っていうのを持って、理性を手段能力として使いこなしながら生きていかねばなりません。

なぜ、これからは感性の時代と言えるのか？歴史的な流れから見ると、これから1000年は感性が成長のもととなると、どうして言えるのか？

ではなぜ近代は理性の時代になったのかと言うと、その理由は中世にある。非合理で不合理な信仰や宗教によって人間が支配されていた。人間の命に潜在している合理への要求が目覚めてくる。これは心理学で言うところの「理屈に合わないことを言われると、理屈を言って反抗したくなってしまう」…そういう心情が湧いてくる。これが中世から近代に至る精神史であります。理性しか信用できないという考えになってしまっていた。抑圧されると非理性的非合理時が内から生まれてくる…その力とは何なのか。それが感性。感じる力はこれはまったく新しい力。感じるということが真実なんだ、頭で考えること全部偽物、仮のもの。だから、トランプさんが出てきたんですね。本音と実感の政治。

感性文明、感性文化、感性を原理にした様々な生き方が現れ出てくる、作られていく。そういう段階にこれから1000年間入るわけですね。そのことによって人類は新しい成長を成し遂げる。理性によって人類が成長する段階は終わったんだ、これからは感性によって人類が成長する時代が始まる。本音と実感を原理にして生きることによって、人間が成長し、新しい過去になかった歴史を作っていける…そういう段階に人類は入っていきます。大激変がはじまっていきます。

3番目の社会構造の変化、社会構造の激変、社会が縦型社会から横型社会へと変わっているっていう事実であります。3000年以上、人間が人間を支配するという縦型の構造で社会は作られてきました。これは社会のあり方で当然と思われてきました。西欧によってアジアが植民地化されて、西欧列強の搾取に苦しむという状況がアジアに出てくることによって植民地の独立戦争がはじまる。1899年にフィリピンが立ち上がった。20世紀は、植民地・独立戦争の世紀でした。これにより、人間が人間を支配することは、悪だという倫理観が急速に広がりました。男尊女卑という考え方も悪となり、男女平等=フェミニズムも誕生。さらに官僚政治批判され、そしてこの社会構造は大転換。縦型社会は一度に崩れてしまい、横型社会へ。

だから社会の中にある会社っていうものも、これまでは経営者が支配、ピラミッド的が当然であった。しかし、それが崩れ、横型の会社のあり方へと変えていかなければならないという流れになってきています。

そして、感性型経営の必要性。理性型→縦型=支配と命令と管理が本質。経営者は社員を支配し、管理し、命令するもので、マネジメントすることを求められていました。しかし、時代は変わり、それらは悪と捉えれるようになってきました。

どういう風に変えていったら感性型、横型の経営になるのか？支配から愛の経営へ変える。愛の経営てゃ？思いやり、心遣いの経営である。支配は全くだめではなく、必要でもある。その前に思いやり、心遣いがあるかが問われる。心遣いがある支配、思いやりがある支配、これが愛の経営。やがては、支配が薄れ、思いやりと心遣いう優先させる…そういう経営に変えていかなければならないと。だけどもやっぱり人を動かす、会社の組織というのは何らかの意味で支配的な力も求められる。だけどもそれにもかかわらず支配の中に思いやりがある支配の中にも心遣いがあると。そして組織は活力を持つ。「こんなにまで経営者は自分のことを心遣いしてくれてる」それがモチベーションになるわけです。思いやりと心遣いをこれでもかと見せる。そういう実践が大事。形に見せる。言葉で態度で目つきで表情で見せるんですよ。そうなると、支配もまた愛になるんですよ。

まだまだ現実は支配的なものが先立って、思いやりや心遣いがあっても見えないんですよ。だから反感を呼ぶ、恨みを買う。社員は自分の力を出し切らない。

スクールウォーズ。京都の高校がラグビーで日本一になる…ダラダラしとった子どもたちが真剣に練習するようになる。それはなぜか？ある試合で109対0で負けたと。同じ高校生なのに悔しくないのかと。

みんな並ばせて殴る…そして、殴られて気付く。本気で自分を思って泣いてまで殴ってくれる大人に初めて有り難みを感じる…。目から流れる涙を見ながら、「ありがとうございました！」と。この人ならついていけるって言うんで真剣に練習し始め、大爆進が始まるわけですよね。背景に愛があれば、ある意味で、暴力も愛に変わる。そういうことも我々は考えておく必要があると思う。

支配の経営は終わった、愛の経営が始まるんだと思うこと、気付くことが大切です。意識そのものが自分のなかにあるかが問われる。命令の経営から対話の経営に変えていく。対話して分からせて納得させて、やる気にさせて、働かせるという。マネジメントを変えなければならない。命令の経営から対話の経営へ…これも横型経営の大事な基本原理であります。

とにかく対等の関係で「なぜ君にこれからやってもらう仕事は大切なのか」を語って、重要なのかを伝える。そして、「なんで君じゃなきゃダメなのか」ってことを伝える。対話的に納得してもらって、仕事をさせる、してもらうそういうモチベーションの作り方っていうのを覚えないといけない。個人面談も社内の仕事を徹底させるために使ってはならない。それではまだ支配や命令となってしまう。個人面談っていうことで大事なのは、その人が会社の外でどんな活動をし、どういう問題を抱え、どういう悩みを持ってどういう人間関係を社会にもって生きているのか。そのために使うべき。

会社の中ではあまり仕事が出来ない人間でも、

社会ではある団体の指導者になっていたり、あるリーダーになっていたり、あるいは家庭のなかで大きな問題を抱えていたり、様々な事情を分かってくれる。そういう状況を了承してくれてる、分かってくれると、それからの働き方がまったく変わってくる。「わかってもらった」という満足感があって、その人が変わる。感謝してあげる、もうそれだけで全然仕事が変わってくる。

それから管理の経営。規則に従ってちゃんとやってるか、常に管理しながらその社員を批判的な目で叱ったり注意したりして、規則から外れないようにあれこれやがましく言うという管理って意識そのものが社員にとっては苦痛。そういう管理を撤廃して、パートナーシップの経営に変える。会社っていうのはその人の持っている長所を使わせてもらう。それが基本である。だけどもみんな短所を見てしまう。短所を許して、長所と付き合っていく。そういうこの仕事の仕方を覚えなければならない。短所は助けてあげる、自分の短所を相手に助けてもらう。お互いの長所を組み合わせて仕事をしていく。これからの時代の企業には、人事課が果たす役割はものすごく大きい。誰と誰を一緒に仕事をさせたら最高の能率があり、最も気分よく働けるか。これが労働環境の整備、究極の最後の労働環境の整備は、人的環境の整備。この人的環境の整備とは何なのか？人的環境の整備とは誰と誰を一緒に仕事をさせたらもっと気分良く楽しく働くか。しかも能率が上がるかっていうことですね。この人間同士の組み合わせっていうことは実際やってみないとわからんってこともあって、最後に残された人間関係の極意というか。能率や成果っていうのを考えた上で誰と誰を組み合わせるかっていうことは、やっぱり現場でいろいろやってみながら、模索的にやっていくことが大事。人的環境の整備っていうのを考えていく上で人事課の果たす役割は大きいと言えるでしょう。

パートナーシップというのは、ただ2人の人間が協力すればOKということではないんです。同じ考え方の人間ではパートナーにはなれないんですよ。パートナーシップっていうのは違った考え方の人間が協力し、違った価値観の人間が協力をしたらどういう相乗効果が出てくるかっていうこと。夫婦がパートナーというのは、男と女だからパートナーになれるんですよ。違ったものを持ってないとパートナーシップという精神は出て来ないですね。これからは同じ考え方の人間ばっかり集めて仕事をしていくって時代じゃない。違った空間から違った時間、いろんなものを持っている人間が集まる個性の時代。考え方も違ってもいい宗教も違ってもいい。発展の原理は相乗効果。考え方の違う人間が一緒に関わればいかなる相乗効果が出てくるか。異業種交流、転換を図るということも関係してくるわけです。発展利益と考えなければならない。そういう時代、原理をパートナーシップって言うんですよ。相乗効果を作り出すことが出来なければ、統合という人間関係の本当の意味が出てこない。

なぜユーロは失敗したのか？みんな集まって、国境をなくして関わろうって言う新しい試みをしたんですけど、それが統一という状況になってしまって、統合から出てくる相乗効果を作り出すということができなかったのでユーロは失敗したんですよ。統一は支配。お互いに批判しあってしまい、ユーロという統一通貨の下で秩序をつくろうと思った…。積極的に相手と関わってそして自らも成長をしようという意欲が出て来なかった。統合っていうのは自分が成長するだけじゃなく、どういう相乗効果が出てくるかっていうそういうことを持って統合。有機的統合による相乗効果。これからの企業も成長の仕方として非常に大事。

どの会社と組んだらもっと発展できるか、最も大きな相乗効果が得られるかを計算するべき。しっかりと組み合わせを考えていく。

感性経営の第一原則が、支配と命令と管理の経営から愛と対話とパートナーシップの経営へ。これが感性経営の大原則であります。ただし、支配・命令・管理を忘れてはならない。組織である限り支配も必要であり命令も必要であり管理も必要。管理なしには組織はまとまらない。愛を対話をパートナーシップを優先させる…そういう形で新しい時代の感性経営は作られていくということになります。

ということで今日は時代背景をお話しながら、感性経営の第一原則についてお話をさせていただきました。